

Beppo and The Octave Stanza (1)

—by G.G Byron

楠 本 哲 夫

Byron は 自我の強い詩人である。バイロン詩の どれをとっても、強い自我意識が バイロンという 人間臭が ふんぷんと匂うてくる。バイロンみずか自らが言明したのだが、<僕は 自分の経験がなければ 詩うことができない >と。

その意味で バイロンは<投影の詩人> である。自らの心の奥深い処に 巢喰う哀しみを 苦悩を 吹きすさぶ瞬間の嵐を 狂える怒濤を 詩うことによって 鎮め得たのである。バイロン詩は 自我の強いバイロンという人間の、瞬時の揺れ動いた心の経験の投影であった。

<何故に 最も愛した祖国英国が、 最も愛した妻 アナベラが 僕を追放したのか ?>バイロンは自らに問いかけて、その答を見出し得なかった。

祖国を棄てることは すべてを放棄することを意味した。誇り高き、由緒ある名門 ブルンBrun 家を離れて 浮草の如く 流離うことであった。

しかし Byron には 生柁の ジョン ブルJohn Bull 気質が 宿っていた。

その血が 流浪の身を 異国の地 イタリアに 東の間を憩うことで すべて の呪縛を 自ら 断ち切ることで そのもって生れた天分としての 諷刺精神が 芽生え この風土、土壤に育ちゆき 見事に 開花した。

それが≪ Beppo ≫であり≪ Don Juan ≫の名作である。

そして それを見事に開花させた 風土、土壤こそ、あの、^{アターヴァ} ^{リーマ} Ottava Rima
の 詩風だった。

1817年の夏の間 ほとんど Byron は、^{ヴェニス} Venice から数哩 離れた ^ラ La
^{ミラ} Mira という村で過ごしていた。

Byron の住居は リンネル反物商の家だった。この街は ^{まち} 商業的企業心と動
物的精神に ^{いき} 活気づいていた。

ここで Byron は また この反物商の妻と雷光石火の如く 恋に陥ちてい
った。

この妻女、^{マリアンナ} ^{セガティ} Marianna Segati は ある意味では 火の女であった。この階
級の ^{ヴェニス} Venice のすべての女性が そうであったように 情熱的に多血質であ
った。一人の子持ち、そして多くの召使にかしづかれて 裕福な暮しの中で、
只 情熱のみを ^{ひたすら} 只管に 追いかける女であった。みづからの道徳、慣習の
世界を超えることに、すこしの躊躇いもなく直進した。

彼女達の世界では——

結婚した女性が、一人の愛人に限り、これをもつことを当然の権利として許
され、その情事は 夫も これを承認した。

^{シグノーレ} ^{セガティ} Signora Segati —— 彼女の夫 —— にしても、この、英国人情夫 —— Byron
—— を公然と認め、みづからの妻を、another ^{シグノーラ} Signora (もう一人の Mrs.) —
— Mrs. Byron と呼びかけた。

かくて、Byronは、妻アナベラを失い、姉オーガスタを失った傷心、流浪の身をここ Venice で底知れぬ情事に溺れていった。

マリアンナは イングランド南部の やわらかい、あの、ひびきにも似た、特有の甘いヴェニス訛りをもつ美しい声の、漆黒の東洋的眼、艶々とした黒髪の、^{つやつや} 羚羊の^{かもしか} 姿態をもつ、だが、烈しい気性の、美しい女だった。

Byronは、親友^{マレー} Murray に マリアンナ のことを書き送っている。

<僕の アドリア海の妖精——マリアンナ——は、ただ今、ここにいる。だから、僕はこの手紙を君に送って以来、彼女の心の揺れ動くままに、僕はここに憩う。>

Byronは この情婦マリアンナと同棲して 夫の ^{ピエロ セガティ} Piero Segali が 週末には、妻の御気嫌伺いに訪れてきた。

8月29日の、夕食の席で、ピエロが とても 変わった物語を話した。Byronの親友^{ホブハウス} Hobhouse も同席していて、彼がこの話を彼の日記に書き留めておいた。

Byronは この逸話にとっても興味を覚えた。というのは、バイロンは イタリアの生活に、そしてモラルには もうすっかり 馴染んでいたのだ。

^{ピエロ セガティ} Piero Segati が Byron と Hobhouse と Marianna に語った 珍妙な物語というのは次の如きものであった。

あるトルコ人が ヴェニスの リジャイナ・ディ、ハンガリアの宿に泊った。その旅人は その宿の女将に 話したいことがあるので部屋に来て呉れと申し

出た。子供と一緒に暮しているその女将は 数年前に、航海に出た舟乗りの夫が行方不明となったまま 今は未亡人の身の上である。

女将は、その泊り客の要請に応じて、いくつかの所用を済ませて、その客室に出向いた。客は部屋のドアを閉めて 彼女の家庭の事と、行方不明になったという夫の事を聞き始めた。彼女は<自分の夫は 海上で 航海に出たまま死亡したものと思う>と答えた。

そのとき、そのトルコ人の客は 彼女の夫には<何か特別の特徴といったものが身体のどこかになかったか>と聞いたので<夫には肩に疵跡きずあとがあった>と彼女は答えた。すると彼は自分の服を肩からずり下ろして <それは こんな疵だろう> と云って 疵跡を示した。そして 語った。<私が 貴女の夫ですよ。私はトルコ へ行っていた。私は そしてそこで、一財産を作った。だから 今、貴女に、三つの提案をしよう。

一つは、貴女が今の愛人の許を離れて 私について来るか。

その二つは、それとも、その愛人の許に留まるか。

その三つは 扶助科を私から受けて ひとりで暮らすか。> と申し出た。

だが この女将は、この三つの提案には、まだ即答しないままでの現況であると、ピエロは その珍妙な逸話を、閉じた。

だが その物語に聞き入り、乍ら マリアンナは バイロンの方を見遣やって、私だったら きっと愛人の許を去って夫のところへ走ることはしない と言った。

Byron は これと 似た話をかつて Milan^{ミラノ} で実は聞いたことがあり、1816、12、24日 付の Moore^{ムーア} に宛てた手紙の中で滑稽な生気に充ちた 刺激的な

物語として述べている。

そして 今回は これに 詩型を与えようとしていた。

Byron は 1817年 9月に≪Beppo≫を書き始めた。そして、12月には、^{マレー}Murray に、宛てて 書いていた。

＜僕は 84節の ^{アクティヴ} ^{スタンザ} octave stanza のユーモラスな詩をかき^お了えたが、これは Mr. Whistlecraft —— 僕は、^{フリヤ}Frere の匿名だと思うが—— の素晴らしい詩風に倣って、僕の格別興味を惹いたヴェニス風の逸話を詩題材としたものだ。＞

そして 10月23日には更に書き送った

＜ Mr. Whistlecraft には 僕ほどの素晴らしい讚美者はいないが僕は 彼の詩風に倣^{なら}って≪Beppo≫という 89節からなる詩をかいた。Beppo は Giuseppe を短くした名前前で、つまり イタリア語の Joseph を 短くした Joe のことだ。＞

Murray が 1818年 2月28日 この詩を出版したときには 95節となり、やがて、99節になっていた。

Byron が、この名作≪Beppo≫を書き上げたのは 実に Mr. Whistlecraft に負うところ大である。

諷刺詩人としての Byron は——それが、Byron という詩人の本領であったのだが——イタリアという風土に適したことによって その作品≪Beppo≫そして さらに未完の大作≪Don Juan≫を 見事に、華麗に、千古に残る珠玉の名篇として開花させたのである。

諷刺詩への発足となったものは Mr. Whistlecraft との出会いだった。そしてこの出会いによって Byron は 祖国追放後 ここ イタリアの地で 諷刺詩への詩作の道を驀進するのである。

Byron は 典型的 ^{ジョン ブル} John Bull である。酒と女とソーダ水よりも、もっとももっと Byron の好んだのは 実は<悪ふざけ><悪戯> ^{いたづら} ロンドンっ子の何よりも好きなあの<落書><ジョーク><諷刺> つまり<ジョンブル気質> であった。

Byron の^{いたづら}悪戯にかけてはまづ超一流で その点では彼の右に出る詩人はいなかったであらう。Walter Scott 卿などは その悪戯の良き相棒であり、生涯 Byron に仕えた老僕フレッチャーは 主人の^{わるふざけ}悪戯には 随分と肝を冷やされたものだった。

その悪戯の爪跡は 今でも致る所に 落書きとして刻みつけられているが、ギリシャの地、美しいエーゲ海を望む スニオン岬の突端 海神ポセイドンを祭る神殿跡にも有名な <バイロンの ^{いたづら}書き>の跡が その説明書きと共に保存されている。その側に、<いたづら書きを禁ず>の制札が建ててあるのは如何にも皮肉で 訪れる観光客と共に バイロン自身微笑していることだろう。

とまれ この諷刺的天分が ものやわからかに発足したのが ≪Beppo≫ の作品である。

諷刺詩人としての片隣は その初期の詩にも 明かに^{うかが}窺える。 例えば——
 ≪ To a Lady who Presented the Author a Lock of Hair Braided with her Own, and Appointed a Night in December to Meet Him in the

Garden >の中で Byron は問いかける——

何故に 溜息をつくのか 泣くのか
 理由なき疾妬心から 愚痴るのか
 愚かしき氣紛れ 狂気じみた 妄想
 ただ悪をロマンチックにしたい為か

しかしながら、1818以前の Byron 詩を代表するものは主として《Childe Harold's Pilgrimage》《the Turkish Tales》《Manfred》であった。

これらのうち、最初の《チャイルド ハロールドの巡礼》は——特にその後の篇、Ⅲ、Ⅳ篇に於て——漂うあの憂愁にみちた美辞麗句は《トルコ風の物語》や《マンフレッド》の力強い修辞法に比べてずっと秀れてはいるけれども、これらのうちのどの三篇の中にも全くバイロンの諷刺詩人としての片鱗は まだ窺えない。

バイロンの若き日の力作《英国の詩人たちとスコットランドの批評家たち》の精力的諷刺ですら諷刺詩人としての天分を明確に印象づける迄には至らなかった。

だが、バイロンは己が詩風の従来の枠の中でいつまでも足踏みすることにはとても満足しきれない、飽き足りない焦燥感で疼いていた。

彼の親友達は皆、バイロンがユーモリストで諷刺的で悪戯好きの一面を見抜いていた。そして友人に宛てたたびたびの数多くの手紙はそのことを立証していた。

バイロンは《チャイルド ハロールド》の第一篇、二篇も、これを ^{メドレー} medley poem として、〈ものやわらかい〉、〈感傷的〉なものから 〈諷刺的〉〈道化的〉なものに及ぶ 多彩なムードを包含する長篇詩としたいと意図した。

その〈^{序文} Preface〉の中で 自ら 書いている。——

〈この長編詩を ^{スベンサー} Spenserian stanza ^{詩体}—— Edmund Spenser 1552-99 が《the Faerie Queene》で初めて用いた詩形。9行から成る詩体。第1行から8行まで弱強5歩格で、最後の1行のみ Alexandrine 弱強6歩格。押韻は、ababbcbcc——でこの長篇詩を書くことに決めた理由は ^{メドレー} medley poem ^{ポエム}として 多彩なムードに盛り込みたいと考えたからだ〉と述べている。

だが この考え方は 恐らく間違っていたかもしれぬ、いや、恐らく、バイロンは 自分が描きたいと望む詩が 思い通りに描けるほどには ^{いま} 未だ その詩才が 熟して いなかったのだろうか。その間の説明 事情が どうであろうと、《チャイルド・ハロールド I, II 篇》は ^{メドレー} medley poem ^{ポエム}としては 完全に 失敗している。

バイロンは 恐らく、《^{シントラの慣習} the Convention of Cintra》(Canto l. xxiv-xxvi) の節の中で 諷刺的に これを描こうと意図している。また 《^{ロンドンの} the London ^{日曜日} Sunday (l. lxix-lxx)》の中で 道化的に、滑稽に、これを描こうと意図している。

しかし、その各の場面で 意欲的に、或いは、退屈に、〈古風で風変わりな趣き〉を盛り込んだ点のみでしか 成功していない。

しかし バイロンは 1817年(29才)の夏頃までには 所謂 同時代の人々が同時代の詩界が中世の終焉と考えた ^{また} 辺り までには 既に ^{など} 辿り着いてい

た。

アナベラ との 離別によって 祖国英国を追放されて 移り住んだイタリアの地が、その風土 慣習が ピッタリと 彼の詩風に ^{かな} 適っていた。かくて、バイロンは 彼の性分に適った この土地に溶け込み、彼の天分を發揮し得る 詩作生活へと 定着できるようになった。

この地での生活は 生きてきた この過し方の年月に比べて とても、肩のこりない 気楽な 快適なものだ と しみじみ実感しうるものだった。かくて バイロンの天賦の、諷刺的詩才の 充分な發揮の機が熟し得る可能性が芽生えてきた。この期において 正にその機を得て Mr. Whistlecraft によって バイロンの手中に 極上の、天来ともいうべき 一つの武器が委ねられた。それは、^{アクティブ} ^{スタンザ} Octave Staza の詩風 であった。

この匿名の^{ぬし}主は ^{トー}Tory 党の政治家、外交官、文人である John Hookham Frere で、バイロンは ロンドンで 既に彼を知っていた。Frere は ^{フリ} ^ア ^{モック} ^{ロマンチック} < mock romantic > な アーサー王に関する詩を 1813年頃書き始めていた。そして 1817年、《Prospectus and Specimen of an Intended National Work, by William and Robert Whistlecraft, of Stow-market, in Suffolk, Harness and Collar Makers.》《Intended to Comprise the Most Interesting Particulars Relating to King Arthul and his Round Table.》という 滑稽な、題名で 彼の最初の二篇を出版した。

便宜上 読者は この作品を その匿名作者にちなんで《Whistlecraft》又は《The Monks and The Giants》——これが、Frere が 完成したすべてである四篇に付与した題目であったが——と呼んでいる。

Frere は 15~16世紀のイタリアのメドレー詩人達、特に ^{ルイ} ^ギ ^{プルチ} Luigi Pulci —— Charlemagne (ローマ皇帝、フランク王) の古い物語を、諷刺的ではないが不敬なユーモアで、彼の《Morgante Maggiore》 28篇として 改作した—

——の弟子としてその詩風を踏襲して書いた。

Frere が 理解した如くに これらの先輩達は 詩作において プロットを 予め練ることをしなかったから 故意に その構想を無視して 書き進んだ。

それでも これら諸先輩の手本を模倣しつつ、 陽気と真面目さの間で 唐突に転換する権利を主張する。尤も彼は、ほとんど完全に滑稽詩であるものの中で、ある限られた程度にしか この権利は主張しないけれども。そして 彼は 思う存分、脱線は繰り返している。Pulci のように 彼も その物語の筋を、中世のロマンスへと転換する。——尤も、Charlemagne ではなく、King Arthur へと。そして Stowmarket の 馬具造りの、William Whistlecraft に 物語を委ねることによって、ロマンスを地上に運ぶ。この意図を遂行するにあたり、当然のことながら、彼は Pulci 同様きびきびした、慣用的言語を用いている。更に 彼は修道僧と巨人たち間の宿恨のアイディアと不器用な若い巨人 Ascopart の性格を特別に Morgante Maggiore から借りてきている。

しかし彼の pulci からの 最も重要な恩義は、彼の連のフォームである。明らかにこれもまた他のイタリアの有名な詩人たちが好んで用いた詩型であった—— とりわけ、Ariosto と Tasso の好んだ詩型であった。しかし、Whistlecraft の場合、Frere は Pulci の影響を受けて Octave stanza (Ottava rima) を用いつつある。Pulci の如く 彼は、彼自身の妙技の中で 底抜け騒ぎを演じている。例えば 連続する 三節を 修道僧のラテン語とされているもので 書いている。そして、その器用な素晴らしい韻で、繰り返して我々を驚嘆させるのである。

R. D. Waller は、彼の《The Monks and the Giants》の出版に際して この 文学的關係についての要約的權威ある説明をしている。そして Frere の業績について思慮深い讃同をつけ加えて Whistlecraft は 一つの、気の利いた洒落 にすぎぬ と述べている。

つまり、それは 現実生活の温かさには欠けていて、この詩には、実は、とるに足らぬ、 だが、生き生きとして、罪のない 少年の 馬鹿な真似、冗談が 意味されているにすぎぬ。

たしかに この詩は 穏やかな、ものやわらかな 楽しさを 与えて呉れる 読みもので、Frere は 作詩家として 韻律者として その軽快な筆によって 我々を楽しませて呉れる。

だが、しかし、 もし それが、是が非でも 発言したくなるような、ある重要なことについての意中を、思想を述べたものであるならば、即ち、それが、我々の経験についての 胸につかえた顕著な 衝動について 述べたものであるならば 我々は 彼の筆致を もっと印象的なものとして 受けとめるであろう。

《Whistlecraft, I, II 篇》が イタリアで ピエロ、セガティが、あの、ヴェニス風の逸話について ディナーの席で 語った頃の時期に、バイロンの手に 渡ったに違いない。

バイロンは 既に ^{アクティブ} ^{スタンザ} Octave Stanza の 詩型で書かれた イタリアの詩人たちの作品は いくつかをこの頃迄には読んでいた。 だが、バイロンは、この Pulci の詩風を倣った Frere との Mr. Whistlecraft による出会い に先立って、Pulci については 全く 知らなかった。

やがて、其の後、バイロンが、《Morgante Maggiore》 の冒頭の篇の省略部分を補い その詩訳を創作することになったのだが、……

兎も角、バイロンは、直ちに、Frere の イタリア式の詩型 及び 詩風の中に、ピエロ、セガティの逸話を バイロン自身のイタリア生活の経験に於ける楽しさを述べるものとして 改作する為の 申し分のない 完全な 媒体と

なる詩型である と直観したのである。

《Whistlecraft》は 中世のロマンスを滑稽に茶化したものであるが、バイロンの《Beppo》は 近代的物語を 諷刺している。

バイロンは この物語を時代的に、すこしばかり、押し戻していることは明瞭だが。彼が 述べているように、〈この物語は、何年か前に、恐らく、30年内至40年前頃起った〉 こととして 語られている。

同じように《Don Juan》も 時代的に Beppo の時代と Byron 自身の時代との中間の時代の頃として その事件の発想を設定している。

だが 何れの場合も バイロンは自身 歴史上のフィクションを書くのだとは考えていない。登場人物は そっくり そのままバイロンと同時代の人々であると考へ、 1780年代の流行、慣習を身につけさせている。

バイロンが、これを考慮するに当って、勿論20世紀に比べて、 社会的推移が極めてよりのろかった時代故に、 気楽に描き得たことは 確かである。

しかし——バイロンは

例え 自らを 同時代の人々としてでなく過去のものとして考えないとしても、必ずや 自らを英国人としてでなく イタリア人と 考へたことは 明らかである。

バイロンは 自らが受け入れた国イタリアを、自らが棄てたイギリスと 比較対照して イタリアの風土、言語、女性に関して より優越性を置き これを強調して詩^{うた}っている。

罪多きことに充^みつるも 言わねばならぬ

わし
 農には イタリアは 住みよいところ
 毎日 陽が照るのを 眺めるが好き故
 ぶどう
 葡萄が 木から木へと (壁だけでなく)
 花縄と連るは 舞台裏のごとく
 人々が群るメロドラマを 観るのは楽し
 初幕が閉じると 踊りが始まる。
 南フランスのそれを まねた葡萄畑で

わし
 農は 秋の夕の 遠乗りが好き
 外套を腰に 巻まいてるか
 馬丁に確かめる 必要もなく
 天気おぼつかが覚束ないとて 気の向くまま。
 わし
 農には わかる 行途ゆくてを塞がれでも
 つづらおれのみち 九十九折の小経の 緑みどりが招くところ
 ぶどう
 葡萄でふらつく赤馬車ふさが 道を塞ぐ
 イギリスでは、なべて 糞くそ、芥あくたの馬車だろうが

ベカフィカスでついでを啄む食事が 好きぢや
 いりひ
 日没を拝むのも好き 明日も太陽ひは昇る
 涙脆い哀しみの あの酔いどれの死んだ目のように
 弱またたく瞬く霧の朝を通してでなく
 蒼空をひとり占めにして 一日は明ける
 雲一つなく麗しく 一文蠟燭あかの明りは要らぬ
 悪臭を放ってロンドンの すすけた大鍋が
 ぐつぐつ煮えたつところとちがって

ラテンに似たやさ柔ことばしい言語が 好きだ
 女のキスに似て 溶けてゆくことば言語
しゆす繻子にかかれた 響きをもって
 甘い南国の息吹の音節を運ぶ
 優しい流音は 滑べるが如く
 ひとつのなま訛り 瀟酒にください
あら粗い北国の口笛をブツブツ、ガラガラ
 シーシー唾つばはき ベラベラ鳴らすとちが異い

女も好きじゃ (儂わしを 許せよ)
 豊かな農婦の あかがね赤銅色ほほの頬
 大きな黒瞳くろめは ひかり肉光ひかりを放ち
 百万言ところの思慕 を投げる
 貴婦人の高ひたいき額は うれ愁い
 だが澄きよみいて淨く 激みっしく凝視めめ
くちびる おもい唇に情を め瞳には心を
 この風土つちの如ごと 柔しく、空ごとの如あたたか 滋い

次の節では バイロンは 祖国英国への、まことに 諷刺的讃辞と この追放の地、イタリアへの讃辞を 実に皮肉的に 投げかけている。バイロンは フランス、イタリアに敵対するものとして、William Cowper の放った英国への愛国的言葉の度々の冒頭の詩行を 讃辞として 借用し 諷刺的に 皮肉っぽく 使っている。

英国よ汝を愛す あまたの疵痕きずはそのまゝに
 カレーの波に呼びかけしことば云葉は今も胸にあり。

言論を愛し 精進を 愛す
 政治を愛す (在りし日の政治を！)
 出版の自由を 驚^がペンを愛す
 人身保護令を愛す (今、それを手にして)
 議会の討論 の激しきを愛す
 とりわけ 手遅れにならぬときの

祖税を愛す 過重ならぬとき
 石炭の炎えるを愛す 廉価なるとき
 ビフテキも愛す なによりも
 一本のビールも 目がないほどに。
 天気も好きだ——雨期は 別だが
 つまり、一年のうちの二ヶ月を除けば。
 神よ祝福を 摂政王に、教会に、国王に！
 つまり、愛する 祖国のすべて。

わが不動の軍隊よ 船をおりた船乗りよ
 貧民の割合、改革法案、わが借財と国家の、
 ささやかな暴動は 自由を示すのみ
 官報に掲載される ささやかな破産
 曇り日の天候 冷たい女
 これも あれも すべて忘れ
 我らの栄光を 大いに崇め
 だがトーリ党には 借りはつくらぬ

それなら、≪ Beppo ≫ は バイロンのイタリア生活の祝歌である。この詩

の最初の5分の1は 謝肉祭を論じたものに混じて付随的にイタリアでの好戦的嫉妬、或いは その欠如えの評言、或いは、ヴェニス Gondola のこと、ローマン・カソリックの四旬節に旅するイギリス人の携帯必需品としてのケチャップ、醤油、チリ紙、唐辛子、そして 医師 のことについての評言から成る詩なのである。

ローラ ^{ローラ} Laura が 夫の長期間にわたる不在中 彼女の情夫とした ^{伯爵} the Count の 登場は オペラでの彼の振舞の描写や、貴婦人随行騎士の脱線へと発展してゆく。

ローラは 最初 帰ってきた夫と 劇場のロビーで会ったとき それが自分の夫だと分からなかった < そのホールでは、人々は踊り 夕食を共にして また 踊った > (lviii)。

そして バイロンは ベニスの社交的集会の事情を知る機会に 巡り合わせる。バイロンはイタリアにやって来て移り住むようになってから もう一年の歳月が流れていた。そしてこの時期の間 この国イタリアのことは 十分に理解することが出来ていた。この国は バイロンには 住むに適していた。

だが、バイロンには 未だ イタリアの生活様式が 当然のこと 自明のものであるとの 理解に達するまでには到達し得なかった。イタリアの生活は バイロンを 祖国英国の呪縛より解放し 自由にし 彼を 楽しませた。

そして 更にそれは 彼に驚異をすら与え ショックをすら与えた。

ベッポ ^{ベッポ} < Beppo > は 十分に その心の歓びとショックの両面がもろに描かれた、イタリアの生活様式の バイロンの心えの 投影である。< Beppo > には バイロンの イタリアへの熱烈なラヴコールが描かれ、そして、それはこの地で愛し得たすべてのことへの、とても 明瞭な冷静なヴィジョンが 共存している。

かくの如きテーマのもとに《Beppo》は英詩の中では、最も愉快的な作品として白眉である。その中の登場人物の三人については とても鮮明に 各々の生活が描かれている。

＜ローラ＞は 美しいが、虚栄的で 愚かな女である。

＜ベッポー＞は センスに富み 且つ活力に満ち溢れた人物である。

＜伯爵＞は 富裕な 道楽者で シャレ男である。

この二人の男が、——まだ トルコ人として変装している夫（ベッポー）と伯爵 が 愛人を 仲にして 対決するときの、その対話によって 各々の明瞭とした目立つ特徴的性格を被露している。

＜伯爵＞の 固っくるしい、ねちねちした抗議的口調は まことに、元気のよい 快活な、ベッポーの逆襲によって 強く撥ね付けられる。

眉間に皺をよせて	伯爵は言う
“貴殿の不慮の出現は	儂としては
趣旨を説明せねば	なるまいか
だが多分、これは	間違いじゃろう。
そうであって欲しい	で、お世辞ぬきで
貴殿のため故	お世辞は止そう。
儂の趣意がお解りかな	わかってほしい”
“貴殿よ、（トルコ人は、きっぱり 云った）	
まちがいじゃないその御婦人は儂の女房じゃ”	

だが 最も 滑稽なことばは、三人が 屋内に入って コーヒーを飲みなが

ら語り会ったときの ローラの 打ち明け話しである。

この詩の20行の とんぼ返り の場面は完全に ローラという女の ベラベラとまくし立てる くだらぬ饒舌 と 愉快的な自己中心的な性格を十二分に描き得て 見事である。

ベッポー
“Beppo! ^{あなた} 貴男の異教徒の名は？
おや、 ^{あごひげ} 貴男の顎髯はとても長い
それで 何故そんなに長く家を離れた？
それが、 いけないと 気付かなかった

“貴男は 正真正銘 トルコ人 なの？
他に女 は ^{めと} 娶っていないの？
トルコは フォーク代りに指を使うの？
ふーん それは美しいショールね 今の ^{わたし} 妾のようネ。
それを ^{わたし} 妾にしてくれない？ あなたたちはポークは食べないそうね。
で、よくも永く 辛捧できたね
おや、私？ とてもとても辛捧できなかった
こんな黄色人種見たこともない。貴男の ^{きも} 肝はどんなの？

ベッポー
“Beppo! その ^{ひげ} 髯は 似合はないよ
剃りなさい もう一日、伸びぬうちに
何故 のぼすの？ あ、忘れたー
ねー、天気より寒くなったと思わない？
私はどう見える？ もうここから動いちゃいけない
そんな変な服を着て 誰かに見つかって

正体を看破られて 身の上話しさせられるよ
 頭髪が短いのネ まあ、すっかり白いちゃん！”

ピエロ、セガティの話の結末は、女が、〈夫〉と〈愛人〉と〈扶助科での一人暮らし〉との中から三者択一を迫られることになる。

だが、ローラからは 慎重な選択はとても考えられぬ。当然のことながら、明らかに無思慮に、彼女は 今まで さんざんに 愚痴をこぼし 小馬鹿にして べらべらと しゃべりまくっていた、その蒸発していた夫の許へと帰ってゆく。そして これも 当然のことながら、この詩の 快活な、イージーゴーイングな 世界の中で、その後の夫婦生活の中でだが、彼女——ポーラ——は

〈ときどき ^{ベッポー} Beppo を 激怒させるが〉
 〈彼と伯爵はいつも 仲良しだった〉 (xcix)

Byron は Octave Stanza に従った場合、Frere の如く、〈概して、構成がよくできているとされる詩〉を創作すべき努力は あまり、いや、全くしなかった。Byron は 思う存分、随時、随所に脱線する権利を主張する、そして 1817年、Frere が 出版した Whistlecraft の二篇の中で——その中では ちよっとばかり横道にそれる以上には あまり脱線していないが、Frere がこの権利を行使した以上に、Byron は、事実上、もっと、もっと脱線を繰り返し、繰り返し用いている。

《Fristram Shandy》—— 1760-71。L. Sterne の 9 番よりなる作。物語よりも興味は 奇人の種々の変った言動にある——に、Byron は とても興味をもち 自ら心酔して 脱線のみから構成される作品の分野の開拓を探究し続けた。

《Beppo》の99節の中の、その物語を述べているのは 僅か 41節だが、しかも、その41節の中でも、さらに、ちょっとばかり脱線している。

その主な仕上げの中で バイロンは ヴェニス^{カーニヴァル}の謝肉祭のことを論じ イタリアとイギリスの生活を比較対照し さらに、イタリア、トルコそしてイギリスに於けるセックスの在り方、モラルを比べ合い、女、財産、詩の問題に 評言を加えている。

これらの脱線を主要な技巧として駆使することによりバイロンは 私達が読んでゆくにつれ、その作者の語らんとする意図を想像させる。

というのは、Frere が、アーサー王の騎士物語を、(具現化せんとする理想に不完全に共鳴する) ストーマケットの一商人に託したと全く同じように、バイロンも、セックスの、からみごとの物語を <擬装と欺瞞に対して鋭い眼をもつ> 派手な、愚弄的、世故^{せこ}に長けた>ナレーターに託している

このナレーター——(彼は自らをそう呼ぶが) この洒落^{しやれ}男は最近、旅行中に失恋した——は、とてもバイロンによく似ているのだが、といて、読者が、この、二人が同一人物であるか否かとその身許を明かにする迄 探るのは野暮だろう。

同時に バイロンは この《Beppo》の作品を書くことで、より以前の作風とは、少くとも、絶縁した。つまり、そのころ、1813—16年の《トルコ風の物語》の如き作品を嘲笑するが如く<もし、僕に、より容易^{イージー}に詩作が出来る技術が身についたら 西欧的感傷主義をミックスして、最も素晴らしい東洋の知識のいくつか売りつける見本^{サンプル}を示す積りなんだが…… li>と 公言して、これらの作品を諷刺的に 描いていた。

《Beppo》はこれを一般的に眺めるときその物語そのものよりも、その道草的、脱線が、よりユーモラスで興味を惹きつける。

だが、Frereが＜陽気＞と＜厳肅＞の間で唐突に転換する権利を主張したと全く同様にバイロンはいや、そのナレーターは、《Beppo》の作品で、時折、よりもの柔らかなあるいは、より激烈なことばを彼の、たわいない、だが啓蒙的嘲笑、諷刺の推移の間に挿入したのである。

そのような挿入的発言の中には xiii-xiv の節における真実だが取返しつかない愛情の問題への喚起 或いは iv の節における若き日の束の間の^{おもい}思想をも含んでいる。

バイロンは明らかに ^{メドレー} ^{ポエム} medley poem — 《Childe Harold's Pilgrimage I, II 篇》が、そうありたいと意図した—如き詩風に、《Beppo》を書くことで、より近づいて行った。かくて、この点で、《Beppo》は《Don Juan》— Byron 詩の本質的、諷刺詩—を目ざして前進していった。

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge. The Poetical Works of Lord Byron: Lewis Prints.
- 3) Leslie A. MArchand, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John D. Jump, Byron: Routledge & Kegan Paul.
- 6) Lafcadio Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂。